

平成 23 年度 学校自己評価表 (No.1)

国際学院高等学校

建学の精神	「誠実」「研鑽」「慈愛」「信頼」「和睦」	重点目標	21 世紀知識基盤社会、国際社会に通用する人格の形成と学習力の育成 特別選抜／特別進学／総合進学／食物調理の各コースの生徒に応じた教育の実践 地域に愛され、地域に育まれる学校を目指した、「地域貢献活動」の積極的な展開
教育方針	「礼をつくし、場を清め、時を守る」		

評価項目	行動目標	具体的方策	評価指標	難易度	中間評価	後期への改善方策	最終評価	目標の達成状況	次年度への改善方策	担当分掌
学習指導	主体的学習習慣の確立	○指導力向上のための授業方法の研究 ○家庭学習の定着化に伴い、宿題・小テストの実施（合格まで） ○定期考査後の学習内容の確認	○公開授業を各期行い、教科の範囲を超えて議論することができた。 ○小テストを実施し、合格まで指導できた。	B	B	○家庭学習の習慣化のために各教科実施の小テストの合格に向けた学習の定着を図る確認が必要 ○小テスト、定期考査の不合格者を出さない事前講習の実施	B	○研究授業週間を定め、全ての教科実施できた。 ○小テストの実施や考査後の再テストは各教科取り組んだ。	○前期しか各教科の研究授業が実施できなかったため、後期の実施を行い年 2 回の実施に向けて準備を行う	教務
		○授業アンケートの周知を事前に行い、全教員が趣旨を理解した上で実施する。 ○集計結果を教科会議で検討し、更なる改善を押し進める。	○授業アンケートの集計結果を基に教科会議などで授業改善のための情報交換が進められた。	B	B	○授業アンケートの結果を授業改善に生かしていけるように、教科会議の議題として取り上げてもらうようにする。 ○新しい授業アンケートを作成し、後期実施	B	○前期のアンケート結果に基づき授業内容や各授業において、小テストの実施、テスト実施に向けた学習（家庭）時間数の向上がみられた。 ○授業向上に向けて、研修に取り組む	○新しい授業アンケートを精選し、学力の定着を図るための授業力向上に向けた研修を更に各教科間で実施する。	
		○チャイム授業を定着させる。教師はチャイム前に職員室を出て教室で生徒と共にチャイムを聞くようにする。	○チャイム授業が定着できた。	A	B	○全ての教員がチャイム前に職員室を出て、教室に向かっている状況である。 ○授業準備を徹底させる。	B	○ほとんどの教員がチャイム前に職員室を出て、教室に向かっている状況である。 ○生徒の意識も向上の方向であるが、授業準備ができていない生徒が若干みられる	○今年度も実施し、生徒・教職員に周知し、授業準備も事前（休み時間）に行うことができるように徹底する。（昨年よりかなり向上している） ○生徒の意識も向上が見られているので徹底を図る	
生徒指導	建学の精神のもと「大づくり」教育の推進	○通常の学校生活および登下校時で「チェックカード」制度を用いて指導の徹底を図る。	○頭髪服装および携帯電話・違反物等、校則違反で指導を受けた生徒がいなかった。	A	C	○頭髪服装違反および携帯電話使用違反、違反物持込が多かった。『段階的指導』を行い、継続指導とする。	C	○頭髪服装違反は減少してきている。しかしながら、携帯電話使用違反・違反物持込は、依然として多く、継続指導が必要となった。	○「チェックカード」の継続、『段階的指導』（各 HR・学年集会・全校集会、「特別指導」）等を実施する。	生徒指導
		○欠席・遅刻・早退の指導の徹底を図る。また、「ノー遅刻 DAY」を実施する。	○欠席・遅刻・早退する生徒がいなかった。	A	C	○限られた生徒であるが、依然として欠席・遅刻が各学年目立った。家庭訪問・保護者との連絡を密にする。	B	○「特別指導（8時登校）」「特別指導日誌」を用いて『段階的指導』をしており、減少傾向ではあるが、まだまだといえる。	○「ノー遅刻 DAY」を継続して行う。また、月 3～5 回（欠席・遅刻・早退含む）で、「特別指導」とする。	
		○「チャイム授業」「校内巡回」の指導の徹底を図る。 ○「誉カード」の徹底を図り、学ぶ姿勢を身につけさせる。	○学習環境・学習習慣・学習態度の学ぶ姿勢が身についた。 ○「誉カード」をもらう生徒が多かった。	B	B	○「チャイム授業」はよくなっている。継続指導とする。 ○「誉カード」を導入し、学校生活全般の向上もできている。継続指導とする。	B	○「チャイム授業」が定着しつつある。また、「誉カード」の成果も継続することにより、更に効果が見られたと感じている。	○「チャイム授業」「誉カード」の徹底を図り、真面目に学校生活に取り組んでいる生徒を支援し、他の生徒の刺激になればと考えている。	
		○全教職員が挨拶・言葉遣いに留意し、「あいさつ運動」が生徒に浸透するよう指導の徹底を図る。	○挨拶・言動がきちんとできた。	B	B	○挨拶は、部活生を中心に大変よくなってきている。言動は、長期的な指導というよりも「しつけ」を行う必要がある。	A	○「あいさつ運動」の推進をしており、大半の生徒ができるようになった。言動は、『段階的指導』が必要となった。	○「あいさつ運動」の推進を全教職員が見本となり、生徒に浸透させる。今年度同様、継続指導とする。	

平成 23 年度 学校自己評価表 (No.2)

国際学院高等学校

評価項目	行動目標	具体的方策	評価指標	難易度	中間評価	後期への改善方策	最終評価	目標の達成状況	次年度への改善方策	担当分掌
生徒指導		○ 自転車通学者のステッカー・装備・雨合羽着用の徹底を図る。 ○ スクールバス乗車マナー・ルールの指導の徹底を図る。	○ 自転車走行マナー等、雨合羽の着用ができた。 ○ スクールバス乗車マナー・ルールが守れた。	B	B	○ 雨合羽の着用は、改善されてきた。自転車走行マナーは、早期に指導対策を講じたい。 ○ マナーは改善されてきているが、朝の出発時間が遅れてきている。継続指導とする。	B	○ 改善傾向ではあるが、安全を第一と考え、「校門指導」「登下校指導」の継続が必要となった。 ○ 「忘れ物」「時間厳守」は改善されていない。「スクールバス指導」の継続が必要となった。	○ 自転車点検は今年同様、2回実施をする。また、「校門指導」「登下校指導」を継続する。 ○ 「スクールバス指導」の継続を図り、『段階的指導』を行う。	生徒指導
		○ 清掃活動の推進を図る。「机の整理整頓」「ゴミの分別」を強化する。 ○ 環境美化の推進を図る。	○ 全生徒が真剣に清掃活動を行った。 ○ 器物破損等がなかった。	B	B	○ 全員清掃はまだ難しいが、担当区域は清掃できている。 ○ 食堂利用、器物破損も見られなかった。継続指導とする。	B	○ 「机の整理整頓」「ゴミの分別」は今ひとつであった。『段階的指導』を継続していく。	○ 今年同様、「机の整理整頓」「ゴミの分別」は継続指導とする。なお、黒板もきれいにし、窓の開閉、電気を消すように呼びかけたい。	
		○ 各関係機関との情報交換を密に行い、問題行動発生前に指導徹底を図る。また、常に天災に備え、万全の体制を期す。	○ 各関係機関との連携が取れた。また、生徒に効果的な指導ができた。	B	B	○ 各関係機関との連携は取れている。また、問題行動に対しても効果的かつ適切な指導ができている。継続指導とする。	A	○ 問題行動に対しての指導は、『段階的指導』および『ケースバイケース』によって指導ができるようになった。	○ 問題行動が発生する前に指導を行い、各関係機関との連携を図りながら、万全を期したい。また、今年同様、2回「防火防災訓練」を実施する。	
進路指導	進学学力の向上と、生徒の希望進路実現	○ 第3学年と連携し、個々の学力の分析と志望校の選定を行う。 ○ 教科担当者に依頼し、一般受験生に対しての講習や個別指導の機会を設ける。 ○ 有名大学の公募推薦・AOでの受験を推進していく。受験指導や志望書類作成に関しては、担任との連携を図る。 ○ ハローワークと連携し、早期活動を推進する。	○ 国公立大及び難関私大への合格者の増加 ○ 有名私大への合格者の増加 ○ 優秀な生徒を国際学院埼玉短期大学に推薦 ○ 進路未決定者（フリーター）0名	A	B	○ 推薦入試において国公立大学合格者を含め、難関大学合格も果たすことができた。 ○ 一般受験生への指導強化を図ることで難関大学への合格数増加を目指す。個別指導が有効であるため、各教科に依頼した。	B	○ 一般受験入試での合格に向けて現在、教科担当者による個別指導が実施されている。 ○ 推薦受験については、難関大学・有名大学への多数の合格を果たした。 ○ 国際学院埼玉短期大学へは12名が進学予定である。 ○ 就職希望者は、ほぼ全員の内定が決まった。  ※1月31日現在	○ 国公立大を視野に入れた一般受験生の増加に努める。次年度の3年生には、5教科をまんべんなく学習している生徒が多い。国公立型の受験に多くの生徒が臨むことができるよう、指導し、生徒の期待に応えていきたい。	進路指導
		○ 教科担当者に模試の結果分析と指導法の検討を依頼し、成果と改善点を明確にする。 ○ 宿題の提出状況を把握することで、家庭学習習慣を徹底管理する。 ○ 教科指導の向上を推進する。 ○ 英検2級倶楽部の設置・運営を行う。	○ 各学年ともベネッセ進研模試において、偏差値55以上の生徒が増加した。 ○ 各学年の評定平均4.0以上の成績優良者が増加した。 ○ 検定2級・準2級を取得した生徒が増加した。	A	B	○ 7月模試結果を受けて、教科担当と今後の指導方針についての打ち合わせを行った。各教科で、小テスト・模試過去問演習・宿題の増加など、自己学習力向上のための工夫を行った。 ○ 成績優良者増加は、概ね達成したと考えられる。 ○ 各検定については、早期から受検の意志を明確にし、対策に臨むよう、生徒を指導した。	B	○ 模試結果を分析すると、難関大学合格レベルの生徒の人数が、年度当初より増加しているのがわかる。生徒の努力とともに、教科担当者の指導の成果がみえた。 ○ 成績優良者増加は、概ね達成したと考えられる。教科の指導のみならず、学年団教師の呼びかけも、早期の考査前学習を促す効果があったと考えられる。 ○ 検定上位級を取得した生徒は、延べ45名を数えた。英検2級倶楽部も効果を上げた。	○ 教科担当者に、数値目標と模試毎の結果分析を提出することを求めている。その資料も全て可視化している。それにより、教科内での分析力も向上されたと考えている。 ○ 考査成績・検定合格などの、優良成績の影には、教科担当者のみならず、必ず学年団教師の努力がある。今後も努力を継続したい。	

※ 難易度 A=かなり難しい。 B=標準的な難易度。 C=比較的易しい。

※ 評価基準 A=十分達成できた。 B=概ね達成できた。 C=あまり達成できなかった。 D=目標設定を見直す必要がある。